

「浄化と共感の儀礼」としてのスウェットロッジ

谷口智子

はじめに

北米やカナダの先住民の間で伝統的に行われていたスウェットロッジは、単なるサウナではない。それは創造主や祖先たちとの祈りの場であり、大地への感謝の場であり、自然や周囲の人々との調和的な関係性の輪への感謝の場である。現在は非ネイティブアメリカンにも解放され、ネイティブと非ネイティブと一緒に行われている。

スウェットロッジは日本でも行われている。筆者はカナダやアメリカ、日本で、ここ5年ほど、定期的にスウェットロッジに参加しているが、このような「浄化と共感の儀礼」はみたことがない。トーキングサークルの輪の中で、シェアリングを行うが、中には感謝の祈りだけでなく、自分の日常の悩みを吐き出したり、泣き出す人もいる。しかし、その場で話されたことは口外しないというグループのルールがあり、絶対的な寛ぎの場は「安全安心」の中で守られる。これは、今日の心理的な手法によるグループワーク・セラピーに似ている。ネイティブ・アメリカンやファースト・ピープルの儀礼そのものに、伝統的なコミュニティにおけるグループセラピー的な要素が含まれている。

本稿では、筆者のスウェットロッジ体験をもとに、グループセラピーやヒーリングとしてのスウェットロッジに焦点を当てて論じ、スウェットロッジが伝統的な集団のヒーリングとして歴史的に機能していた可能性と、現代非ネイティブも含めた集団的なグループセラピーに関わる癒しの儀礼の側面に注目し、アメリカやカナダにおける刑務所や少年院での利用の実態についても考察する。現代的な集団的ヒーリング・セラピーとしての（または「浄化と共感の

儀礼」としての) スウェットロッジの可能性について整理したい。

1、筆者の原体験

筆者のスウェットロッジ初体験は、2016年8月のカナダである。サスカチュワン州のクリー族ホールレイク居留地で、4日間のサンダンスの合間に毎日行われていたスウェットロッジに参加した。スウェットロッジは汗蒸幕である。柳の木の枝で作った円形の骨組みをベースに、本来はバッファローの皮で覆って包む円形型のドームである。日本で行う場合は、代用として竹材や広葉樹、毛布で作る場合が多い。

カナダ先住民クリー族の行っている儀礼は、現在ラコタ由来のものであるが(ラコタ族が現代のアメリカ先住民の霊的指導者としての地位を確立しているのには理由があり、1960年代以降のレッドパワームーブメント、AIMの活動やその歴史によるものである)、数十年間、カナダやアメリカのファーストピープルは、自分たちの部族の伝統を取り上げられ、子供たちを強制的に白人の寄宿学校に入れられていた経緯があり、各部族の伝統文化は、オリジナルな形ではほぼ失われてしまっているという現状がある。その中で、ラコタ族をはじめとする平原インディアンは、17世紀以降の歴史的な迫害に耐えながら、ネイティブの宗教的伝統や神話、儀礼をかなり根強く守って継承しており、1960年代以降のネイティブ・アメリカンのレッドパワームーブメントを通じて、精神的な指導者になっていった(その歴史的な経緯については、ラコタ族のレオナルド・クラウドッグの著書『クラウドッグ』¹⁾に詳しい)。

サンダンスという大きな儀礼の前で、毎日行われていたスウェットロッジに筆者は初参加したのであるが、なんの予備知識もなく、およそ2時間ほどの熱いサウナに入るといっただけの気持ちで入った。しかし、そこは単なるサウナではなく、みんなで和気藹々とする楽しいおしゃべりの輪というわけでもなく、「祈り」と「共感」の場だった。

祈る対象は、創造主(ワカンタンカ)、祖先たち、東西南北を守るスピリッ

1) レオナルド・クラウドッグ他著、『魂の指導者 クロウ・ドッグ——スー族メディスンマンの物語』、サンマーク出版、1998年。

トたち、大地、中央にあつて熱々に温められた花崗岩（祖父）、大地（祖母）などである。スウェットロッジの円形ドームは、大地の子宮（イニピ）であり、入り口から、左から右に時計回りに奥へと膝をついて這いつくばって、中に入っていく。筆者が体験したのは、男性と女性の混浴スウェットだったが、最初に女性、後から男性が入っていった。這いつくばって歩くのは、赤子のよちよち歩きに似ており、これは母である大地の子宮に入っていくための敬意を表すことだという。石は毎回7つ入れられ（7は聖なる数）、休憩を挟んで、ラウンドは4回行われる（4は東西南北の数で聖なる数の男性数。ちなみに女性数は3。4と3を足せば7で、男性数と女性数の組み合わせの7が完全な聖数になる）。ラウンドが進むにつれ、焼いた石の数が増えていくので、クライマックスまでにはかなり中の温度は熱くなっていく。しかし我慢大会ではない。水が飲みたいと言えば、休憩の時に水を回してもらえる。男子はトランクスのみの裸、女性はTシャツとロングスカートで入るのが定番である。

筆者が初めて体験したカナダのスウェットロッジでは、若いネイティブの女性が自分の悩みを話しながら泣き崩れていた。小さな子供を抱え、離婚したシングルマザーである、という若い女性は、守ってくれる男性もいない生活に、アルコールに溺れて毎日泣き暮らしているという。「自分はアルコール依存症になっている。子供のためにも自分の精神と生活を立て直さなければ」という悩みを吐き出し、創造主や祖先たち、スピリットたちに向かって己を悔いて、新たな誓いを立てる祈りを彼女は行った。右隣の女性がそのような深刻な悩みを泣きながら吐き出し、真剣に祈っているのをみて、訳もわからず初めてスウェットロッジに入ってみた筆者は大変驚いたのだった。ここは自分の弱さ、脆さ（vulnerability）を曝け出すことのできる、絶対「安全安心」な場所なのだ。個人をしっかりと支えるコミュニティの力の強さに驚いた。そして、誰が何を言っても「ホーホー」と相槌を打って傾聴し、一切ジャッジしたり批判したりしない。グループ傾聴による共感力と、それによるヒーリングの力があつた。

スウェットロッジは、単なる浄化のサウナではない。そこには個別の祈りがあり、集合的な祈りがある。コミュニティ・メンバーの「共感的傾聴」によ

る、グループヒーリングの場所でもある。まず参加者は創造主や祖先たち、東西南北のスピリットや大地である祖母、焼かれた太古の祖父である石に祈り、結果、周りの参加者にもグループで傾聴してもらい、自分の祈りや決意を結果的に聞いてもらう。超越的な存在であるスピリットの「見えない」家族やこの世の「見える」兄弟姉妹（スウェットロッジなどネイティブの儀礼に参加した親密な関係者は、「兄弟姉妹」と言われる。人類も広い意味では「兄弟姉妹」）に祈りを聞いてもらうのである。この「傾聴」や「共感」の装置は、もともとネイティブの儀礼に備えられたものだったのか？ だとすれば、とてもよく練られているし、コミュニティの維持に大変優れた効果をもたらすだろう、と筆者は感動した。

しかし、右隣のシングルマザーが祈った後、筆者の番になり、深刻な悩みを吐き出す必然性もなく、作法もよくわからず、ひたすら慌てた経験がある。その時筆者は、「初めてネイティブの儀礼に参加できて嬉しい、感謝します、サンダンスが成功するように祈ります」というようなことを言ったのだった。その時期、スウェットロッジは毎日行われていて、自分の体調の良い時に、定期的に参加することになった。

2、「共感の儀礼」もしくは「儀礼の共感的側面」

「共感の儀礼」というのはそもそもあるのか。あるいは、「儀礼の共感的側面」というのは、これまでの儀礼研究で指摘されていたのか。そのことが大変気になったので、先行研究で儀礼の共感的側面について議論されていたのか、ここでは検証してみたい。

儀礼には大きく年中行事と通過儀礼があるが、スウェットロッジは、定期的に行われる「浄化の儀礼」であり、どちらかという、日常的に行われる儀礼である。ネイティブにとっては、「パイプセレモニー」（グループが輪になってパイプを回してタバコを回し飲みする祈りの儀礼）と同じように、日常的な祈りの儀礼である。

宗教社会学者のデュルケムは、「儀礼」を聖なるものとの関わり方に着目して分類し、「消極的儀礼」と「積極的儀礼」に分けた。消極的儀礼というのは、

「禁忌」を例にするとわかりやすい。「〇〇してはいけない」というのが、タブーを中心とした儀礼である。聖域に入ってはいけない、女性が生理中は、スウェットロッジに入ってはいけない、というもタブーである。しかし、この解釈が重要で、女性が生理中スウェットロッジに入ってはいけないのは、生理中の女性が「汚い」存在だからでなく、生理中の女性そのものが「聖なるもの」であり、その霊的力の強さゆえ、すでにスウェットロッジに入っているものと同じくらい、パワフルである、という理由による。女性は産む存在ゆえ、生理中の女性は産む力、生命の創造力にあふれており、わざわざ大地の子宮である「イニピ（スウェットロッジ）」に入る必要はない、というのがネイティブの考え方である。

一方、「積極的儀礼」とは、神や聖なるものとの結合を求める儀礼であり、その例として、「供儀」がある。供儀は、神に生贄を供える宗教儀礼である。動物や人間を供儀として神に捧げる儀礼は、古今東西あり、聖なるものと俗なる我々の世界を結びつけ、社会的統合を果たす機能があると考えられている。積極的儀礼として、農耕儀礼（農業に関する儀礼、豊作を祈ったり感謝したりする）、治療儀礼（病気を治したり癒やしたりするために行われる儀礼）、戦争儀礼（勝利を祝うために行われる儀礼）などがあり、儀礼が行われる目的によって分類できる。危機的な状況に対応するための危機儀礼というのもあり、雨乞いや治癒儀礼などもそうである。社会全体で何か大きな危機に出会った時、例えば日照りによる凶作や、疫病の蔓延などを避けるために危機儀礼が行われたりする。儀礼は複数の機能や目的を持っていることが少なくない。

スウェットロッジは本来「浄化の儀礼」ゆえ、これまでの分類によると、「治癒儀礼」（病気を治したり癒やしたりするための儀礼）に近いと思われる。心身の健康が、個人の幸福への第一歩だからだ。その個人とは、コミュニティに支えられ、コミュニティを支える存在である。その個人の、霊的、精神的、身体的、環境的調和が失われると、病気になると考えられているため、スウェットロッジで行われるのは、その調和を取り戻すための、コミュニティ・サポートによる集団的な治療・治癒儀礼と言えるのではなかろうか。しかしその強化的な治療・治癒儀礼としてスウェットロッジが、コミュニティ・サ

ポートによる共感の儀礼、傾聴の儀礼、祈りの儀礼として特徴的にあるとは、儀礼研究者によって、ほとんど指摘されてこなかったことであろう。従って私はスウェットロッジを次のように定義したい。スウェットロッジは、集団にとっての「治癒儀礼」であると同時に、何より強力な「共感の儀礼」であると。共感されることによる、傾聴されることによる集合的な「癒し」の力が働くのだ。それゆえ、スウェットロッジは、先行研究者が数多く指摘しているように、結果として集団的なグループ・セラピーになりうる。

3、グループ・セラピーとしてのスウェットロッジについての先行研究

スウェットロッジが祈りと共感的傾聴による集合的な癒しの力を持つ「治癒儀礼」「浄化儀礼」と定義したところで、ここでは、スウェットロッジについての先行研究で、その治癒的側面にフォーカスした先行研究をまとめたい。近年で最も引用の多い論文の一つが、マイケル・T・ギャレットというチェロキー族東バンド出身の研究者（社会福祉や心理学的治療が専門）の「ビジョンを求めて泣く：治療的介入としてのネイティブアメリカンのスウェットロッジ儀礼」²⁾であろう。ここではまずその論文を扱い、研究の要点をまとめてみよう。

ギャレットによれば、スウェットロッジの儀礼は、ネイティブ、非ネイティブにとって、今や代替的医療、メンタルヘルス、強制、薬物乱用の治療センターで使用されることが多くなっている。ここでは、①スウェットロッジの背景、②ネイティブアメリカンの精神性の要素、③起源の物語、④文化的なシンボル、⑤スウェットロッジの効果について、大まかに論じられている。その上で、スウェットロッジの儀式やスウェットセラピーをカウンセリングの補完的なアプローチとして取り入れることの意味を説明している。ギャレットによれば、このような治癒儀礼の主な目的は、「自分との関係を良好に保つ」ことにある。これは、自分自身、他者（家族、友人、コミュニティなどの関係）、自然環境、精神世界との関係やつながりを尊重したり、癒したりすることを意味

2) Michael T. Garrett et al., "Crying for a Vision: The Native American Sweat Lodge Ceremony as Therapeutic Intervention", *Journal of Counseling & Development*, 2011, Volume 89, pp. 318-325.

する。ネイティブの視点から見ると、これらの儀礼の根本的な目的は、ほとんどの場合、心、体、精神の調和とバランスを通して、自然環境との強いつながりの感覚を作り、維持するために感謝を捧げることである (Garrett, 2011, p. 318)。

個人の変容は孤独な自己実現のプロセスであると西欧文化では一般的に考えられているが、伝統的なネイティブアメリカン世界にとって、癒しと変容は、その人のサポートネットワーク (家族、一族、コミュニティなど) の中で行われるべきであるものと常に考えられている。従って、スウェットロッジは、身体、心、精神を癒したり浄化したりする儀礼であると同時に、生命のエネルギーを尊重するという神聖な目的がある。参加者はそれぞれの関心事を伴ってスウェットロッジに入り、一緒に汗を流し、祈り、歌い、話し、時には一緒に黙って座ることで、個人とグループの調和とバランスを求めるのである (Garrett, 2011, p. 320)。

スウェットロッジに関わるネイティブアメリカンの精神性は、自然環境との関係において調和とバランスを求めるという本質的な概念を中心としている (Deloria, Silko, & Tinker, 2003)。ネイティブのスピリチュアリティにおけるバランスとは、人が宇宙と調和している、いわば自然の流れに沿って歩んでいるという望ましい状態である (M. T. Garrett & Wilbur, 1999)。一方、「不調和」や「不調」とは、宇宙やその神聖なリズムから外れていることを意味し、病気を招くことになる。不調和とは、私たちがバランスを崩し、エネルギーの焦点が定まらず、宇宙の中での自分の位置を見失ったときに生じる (Garrett, 2011, p. 321)。

東西南北の方向は、それぞれ人生の一面を象徴しており、相反するもの同士の間での相互作用や、4つの方向間の相互作用が、人生における調和とバランス、そして全体の中心を示すものとして暗示されている。これらの方向は通常、儀礼の中で提示され、体験される。人が共同体や、自然との関係のバランスを乱したり、混乱させたりすると、4つの領域のいずれかで病気や疾患が発生する可能性があり、それは儀礼を通じて修正されなければならない。多くのネイティブアメリカンにとって、健康と幸福の概念は、身体的な状態だけでなく、精神

的なものである。そのため、自然環境の中の特定の場所は、生命の聖なるエネルギーを称えるための儀式が行われる神聖な場所として、ネイティブアメリカンのコミュニティ内で記憶されている最も大事な場所に建てられる³⁾。

4、スウェットロッジの準備と世界観

スウェットロッジの儀式の準備の方法と、その世界観について、神話と構造に分類して説明する。

① 準備

スウェットロッジの準備では、儀礼を行うための神聖な場所を最初に探す。スウェットロッジは、通常、小さな亀の形をした住居で、母なる大地のさまざまな素材(木の苗木、木材、樹皮、岩など)を探し出し、それぞれの自然物の許可を得て建設される。決められた聖地の中央に岩場を作り、その周りに東、南、西、北の四方に配置された材料でロッジを作り、動物の皮、毛布、防水シート、織られたマット、または樹皮と土で覆う。一方、火の番人(通常は若い見習いであるファイヤーキーパー)は、儀礼用の石を加熱する聖なる火の世話をする責任がある。儀礼の参加者は、衣服やアクセサリーなど脱ぎ(男性は上半身裸、下半身はパンツ、女性はTシャツとロングスカート)、「母なる大地の子宮」であるスウェットロッジに一人ずつ入る。参加者は、生命の輪を表す聖なる円の中に座る。次に、焼いた石の中に運び入れ、フラップで開口部を閉じる。中の暗闇は、精神の暗さ、参加者の無知を表しており、そこで浄化される。

スウェットロッジの儀礼は「創造主」の真の声である「静寂」から始まる。グレートスピリット(創造主、大霊であるワカタンカ)、母なる大地、四方向、精霊たち、自然界のすべての関係者に呼びかけた後、特別な水、またはハーブの混合物を熱した岩にふりかけ、浄化の蒸気を発生させる。パイプは、太陽の軌道を模して、通常時計回りに、東から移動しながら人から人へと中で渡される。各人はそのパイプが回ってきた時、自分の祈りを創造主や祖先た

3) Deloria et al., 2003; M. T. Garrett & Garrett, 2003; Hirschfelder & de Montano, 1998; Garrett, 2011, p. 320.

ち、スピリットたち、周囲の人々と分かち合う。これを何度か繰り返すのが「ラウンド」と呼ばれるサイクルである。参加者は、家族や友人、そして互いのため、自分自身のために祈り、力、癒し、保護、祝福を求め、自然界の生物に対する危害の許しを求める。また、太鼓と共に歌われたり、何か特定の儀礼⁴⁾が行われたり、特定の問題が話し合われたりすることもある。セレモニーが終わると、参加者はスウェットロッジから出てきて、近くの川、池、湖などで冷えた水を浴びることもある。その後、参加者はお互いに自分の経験を振り返り、その経験をシェアする時間を持つ。

② 神話

次は、最初のスウェットロッジがどのようにして誕生し、どのようにして全ての人々のための神聖な癒しの道具となったのかを、多くの部族の伝統から抜粋した起源の物語である⁵⁾。

昔、昔、昔、ファーストピープル（アメリカ大陸に最初に住んだ先住民のこと）に病が訪れました。その問題を話し合うために、協議会を開くべきだと決められました。四方八方から全ての生き物が集まり、大きな会議を開いて話し合いました。4日間、彼らは断食し、祈り、瞑想し、ビジョンとガイダンスを求めて、何らかの方法で治療を助けようとしてきました。東からイーグルとハミングバードが最初にサークルに入ってきて、太陽の火花を持ってきて聖なる火を灯しました。次に南から木とビーバーが入ってきて、火を燃やすための木と、火を囲むための大地の石、そしてタバコを持ってきて供養しました。次に西から熊がやってきて、川の急流から水を入れた籠を持ってきて、火を消すのに役立てました。北からは鷹と鹿がやってきて、聖なる火に

4) 筆者が参加した2019年9月のスウェットロッジでは一度、ラコタ族のメディシマンが、スウェットを行った千葉県成田市付近で亡くなった死者の慰霊のために特別なラウンドを行った。なんと江戸時代に死んだ侍のシンゾーのための慰霊のラウンドであった。

5) Randall A. Lake, "Between myth and history: Enacting time in Native American protest rhetoric", *Quarterly Journal of Speech*, Volume 77, No 2, 1991, pp. 123-151.

命の息吹を与えるために風の静けさを運んできました。たくさんの生き物たちが話し合ったり、祈ったりしているうちに、火がかなり大きくなっていることに誰も気づきませんでした。慌てたカラスは、火を消そうと急いで火のそばに行きましたが、近づくと火で羽が黒く焼けてしまいました。驚いたワタリガラスは、熱さから逃れようとして岩につまずき、水の入った熊のバスケットを火の上に倒してしまいました。そして、水の入った熊の籠を火の上に落としてしまいました。火が湯気を立て始めると、カラスが助けを求めて鳴き始めました。熊は動物たちに急いで皮をかぶせるように言いました。動物たちがカラスに覆いかぶさると、カラスは歌い続け、汗をかき始めました。このようにして、地域の人たちはワタリガラスが困っているときに、みんなで応援したのです。それが終わると、ワタリガラスは「これは、祈りと癒しのためのスウェットロッジと呼ばれるべきだ」という素晴らしいビジョンを見ました。こうして最初のスウェットロッジが誕生し、ワタリガラスは偉大な医師として知られるようになったのであります。しかし、彼は決して歌がうまいとは言えません。だからこそ良いのです (Lake, 1991, pp. 153-154)。

このことから人々と自然、スピリットとの目に見えない結びつきがスウェットロッジで大事にされていることがわかる。また、ワタリガラスが、スウェットロッジの創始者であり、治癒の賢者だと伝えられていることもわかる。

③ 構造

次は、スウェットロッジの構造について説明する。ロッジの円形（時には楕円形）の形状は、宇宙と全ての生命の起源である子宮を表している。セレモニーで使用される石は、大地の揺るぎない癒しの力を象徴している。円形の構造体を構成するポールにはさまざまな木材が使用されるが、最も一般的なのは柳である。柳（または他の木材）の苗木は、宇宙の4つの主要な方向を表す東西南北に設置され、火、土、水、風の4つの要素の力を象徴している。儀礼に使われる水は、全ての生物に不可欠な要素であり、創造主の生命を与える力を

象徴している。また、熱い石に振りかけられる水の蒸気は、創造主に向かって立ち上り、人々の目に見える祈りと、年長者、または祖父たちとみなされる石（溶岩が多い）に含まれる古代の叡智の解放を意味している。セレモニーに使われるハーブやタバコも、祈りの神聖さを通して、全てのスピリットに捧げられる。

スウェットロッジを覆う被覆材は、元々はバッファローなど動物の皮だったが、最近では毛布や防水シートで覆われることが多い。ロッジの入り口は、手や膝をついて入るように低くなっているのが一般的で、これは母なる大地の胎内に謙虚に戻っていくことを象徴しており、中に入ると真っ暗闇に包まれる。対照的に、ロッジ入り口を覆うフラップを開けて中に入ると、「無知とエゴの暗闇から解放され、精神の再生として真実と光と善の世界に参加者が再入する」ことを意味するという（Garret, 2011, p. 321）。



写真1 竹材と毛布で作った岐阜・明宝高原のスウェットロッジ
(2021.11.6筆者撮影)

④ 祈り

次の祈りは、治療目的のメディスンスウェットや通常のスウェットロッジの儀式で使われる祈りの一例である。

大いなる創造主よ、私たちは謙虚な気持ちであなたの前におり、あなたに助けを求めます。このハーブを捧げて祈ります。私たちは宇宙の聖なる四方向と力に祈りを捧げます。北の空気の精霊に、東の火の精霊に、南の地の精霊に、西の水の精霊に。

祖父である太陽、祖母である月、母である大地、そして自然界の全ての関係者に祈りと感謝を捧げます。あなた方がいなければ、私たちは生きていくことができないからです。もし私たちがあなた方に危害を加えたり、傷つけたりしたことがあれば、あなた方が許してくれるよう願います。私たちは祈り、このタバコとハーブを捧げ、あなた方が私たちを治し、癒し、浄化し、保護してくださるよう願います。私たちは、年長者、女性、子供、そして同胞のために祈ります。私たちは、世界中の平和、調和、そして癒しを求めます (Lake, 1991, pp. 173-174)。

治療場でネイティブアメリカンのスウェットロッジを利用することは、過去数十年の間に、アメリカ合衆国やカナダ合衆国で増加しており、その治療効果に対する臨床研究も増えている⁶⁾。多くの場合は、ネイティブのクライアントに対して、その文化的な生き方に合致した方法で、治療を提供する試みが中心となっている。これは、伝統的な方法を守ること、個人、家族、一族、コミュニティの中に調和が保たれるという先住民の考え方による。このことは、例えば、居留地内外の住宅地の治療センターなどで、アルコール依存症やその他の物質依存症の治療のために、スウェットロッジのような伝統的な先住民儀礼を用いる際も同様である。

スウェットロッジをはじめとする伝統的な治療法は、病院やクリニックなど

6) Garrett, 2011. および、本稿の後半で扱う Irwin の論文など。

の医療施設だけでなく、刑務所でも使用されている。実際、ネイティブの治療施設の50%以上は、補完的な治療としてスウェットロッジを使用しているというデータもある。しかもこれらはユニークではあるが、歴史的な儀礼の構造や現代の治療的介入という点では、決して新しいものではない。メンタルヘルスのカウンセラー、セラピスト、スピリチュアル・ヒーラーが、スウェットロッジに参加することの有効性は、多くの研究で示されている。

そのため、ネイティブアメリカンのスウェットロッジの力を使って、個人、グループ、コミュニティのメンタルヘルスの改善に働きかけることができる (Garrett, 2011, pp. 322–323)。

5、アメリカやカナダの刑務所におけるスウェットロッジの実施とその効果

ここでは、アメリカやカナダの刑務所におけるスウェットロッジの実施とその効果を、いくつかの先行研究からまとめてみよう。

ゴッセージら (2003年) は、Dine' Center for Substance Abuse Treatment の受刑者を対象に、3年間にわたってスウェットロッジの効果を調査した結果を示している。参加者は18歳から64歳までの123人の受刑者で、全員がスウェットロッジに参加した。収容者からデータを収集するために、4つの自分記入式アンケートを作成した。その結果、文化的、社会的、身体的な変数の測定において、有効な改善が見られた。例えば、参加者にとっての鉱物、動物、人間の世界との関係性が向上した。

暴力行為の減少、医療問題やそれに悩まされる度合いの減少、身体全体の健康感の増加、婚姻状況の大幅な改善などが見られた。全般的に、参加者の飲酒量が減少したことが示された (平均値は6.7杯→5.3杯)。この減少は統計的にはそれほど有意ではなかった。また、ゴッセージらは、同様の先行研究で、スウェットロッジに参加した100人の受刑者データを分析した結果、このような儀礼に参加しなかった他の受刑者の投獄再犯率が30~40%と推定されるのに対し、参加者の投獄再犯率はわずか7%であったという結果を報告してい

る⁷⁾。

スウェットロッジによる発汗療法は若い男子にも有効である。コルマントとメルタは、グループホームに入所している破壊的な行動をとる、民族的に多様な4人の少年を対象としたパイロット研究で、グループでのスウェットロッジと、グループカウンセリングを組み合わせることの効果を調べた⁸⁾。少年たちは、サウナを使った12の発汗療法セッションに参加し、自己記入式のアンケートに答えた。その結果、4人の少年のうち3人は、発汗療法を含む治療期間中、自尊心の尺度やグループホームでの治療経過に改善が見られた。全体として、少年たちは、経験的なグループワーク、カタルシス、普遍性、模倣行動、対人学習などを重要な治療要因として認識していた。さらに、少年たちは、汗をかくことでリラックスでき、ストレスが解消され、達成感が得られると回答した。スウェットロッジは、ネイティブと非ネイティブの両方を対象とした様々な環境において、パワフルで、かつ、デリケートな癒しの形となったのである。

イルウィンは論文「ウォーキング・ザ・ライン 刑務所でのパイプセレモニーとスウェットロッジ」で、ネイティブ・アメリカンの囚人たちが、刑務所内で先住民の宗教的慣習、特にパイプセレモニー、スウェットロッジ、祈りと太鼓のセッションを受ける運動（AIMによる運動）を概観した⁹⁾。これらの実践は、現在では先住民の宗教的アイデンティティの主要な表現として認められたいくつかの基本的な儀式を中心に組織された、幅広い先住民の精神的伝統を支持する新しい運動の基盤を形成している。1970年代初頭から、この運動は刑務所や裁判所、あるいはマスコミでの認知を求めて戦ってきた。

イルウィンは、論文の前半で、パイプ運動の歴史を、重要な訴訟事例の調査

7) J. Phillip Gossage, et al., “Sweat Lodge Ceremonies for Jail-Based Treatment”, *Journal of Psychoactive Drugs: Morning Star Rising: Healing in Natibe American Communities*, Volume 35, No 1, 2003, pp. 33–42.

8) Stephen A. Colmant, Rod J. Merta, “Using the sweat lodge ceremony as group therapy for Navajo youth”, *The Journal for Specialists in Group Work*, 24(1), 1999, pp. 55–73. Stephen A. Colmant, Rod J. Merta, “Sweat Therapy”, *Journal of Experiential Education*, 2000, pp. 31–38.

9) Lee, Irwin, “Walking The Line: Pipe and Sweat Ceremonies in Prison”, *Nova Religio: The Journal of Alternative and Emergent Religions*, Vol. 9, No. 3 (February 2006), pp. 39–60.

を通じて振り返っているが、後半で、パイプセレモニーとスウェットロッジの象徴的な側面が、先住民の宗教的世界観の育成を通じた囚人のリハビリテーションに貢献しているいくつかの事例を取り上げた。また、刑務所に精神的な助言者を提供する目的で様々な先住民の社会が形成されたことや、この運動が居留地に与えた影響についても取り上げている¹⁰⁾。ここでは、刑務所内の囚人のリハビリテーションとして、スウェットロッジがその更生にどのように貢献しているかをリーの研究に依拠して論じ、「共感の儀礼」として、またはグループヒーリングとしてのスウェットロッジの側面について考察したい。

パイプセレモニー（タバコの儀礼）が精神的な関係のネットワークを維持するための中心的な手段であるとするれば、スウェットロッジは先住民の収容者がそれらの関係に対する意識を高めるために浄化を受ける敬虔な場所である、とイルウィンは言う（Lee, 2006, p. 51）。スウェットロッジは、祈り、癒し、浄化、そして深い個人的な共有の場であり、精神と肉体の神聖な次元へと導く手段でもある。ロンボック刑務所では、テリー・ベア・リブス（ラコタ族）が「スウェット・ロッジは浄化の場であり、礼拝の場であり、インディアンの信仰はスウェット・ロッジにある。そこに入ると、私はすべての関係者のために浄化し、祈り、私の人々と接触する」¹¹⁾と言っている。

ネバダ刑務所では、チップマンク・バーンズ（パイユート族）が「スウェットの兄弟たちは、あなたが必要としているサポート、アドバイス、問題や苦悩に対するガイダンスを与えてくれる」¹²⁾という。サン・クエンティンでは、ソニー・ウィリアムズ（チョクトー族）が、「スウェットは、2人の敵が一緒に座って、兄弟として出てくることのできる唯一の場所だ」と述べている¹³⁾。また、レニー・フォスターは、「スウェット・ロッジは、身体、心、精神を浄化する最も古い形態の1つで、行動、態度、責任、尊敬、節制を洞察するための

10) Irwin, *Ibid.*

11) Bear Ribs v. Grossman (No. 77-3895 RJK) in Walter Echo Hawk and Roy S. Haber, *Prison Law and the Rights of Native Prisoners* (Boulder, CO: Native American Rights Fund, 1985), "Bear Ribs Brief," p. 4, 6-7, 11.

12) Spotted Eagle, *The Great Spirit Within the Hole*. Chipmunk Burns のインタビュー。

13) Spotted Eagle, *Ibid.*

非常に深遠な療法である。自分の問題について祈り、歌い、瞑想したり、家族や愛する人への祝福を求めたりするために訪れる場所なのだ」と述べている¹⁴⁾。

イルウィンによれば、実際にスウェットロッジを使用したことで、連邦や州の刑務所で先住民の囚人同士の暴力や衝突が発生したことはない¹⁵⁾。一緒に汗をかくことで、親族関係のメタファーに基づいた慰め、癒し、浄化、感情の明瞭化が得られるためだ。スウェット・ロッジの意味領域は、複雑なメタファーや起源の物語に描かれており、多くの儀式的中心であると同時に、ビジョン・クエストやサンダンスのような、より複雑な儀式的の前段階でもある。スウェットロッジは「母なる大地の子宮」であり、曲がった木の骨組みは母なる大地の肋骨である。その子宮の中にいるということは、謙虚さと尊敬を示し、ロッジから出てくるという再生のテーマを意味している。子宮を象徴することで、スウェットロッジは出産にまつわる女性的な力を神聖化し、生命や家族の源である女性を尊重することを強調している。また、ロッジは、自然の要素の力が参加者の癒しと蘇生のために一体となる場所でもある。

スウェットロッジで使用される岩石は、太古の知恵を表す「祖父」であり、耐久力、強さ、犠牲など古代の力を表す。創造的な力として、石はその熱を蒸気の形で放出する。生命の息吹は、創造の原初の息吹を意味し、今、新たに「行動に移す」ことを表している。ロッジの中心にある熱は、「魂の再燃」と「創造主、家族、コミュニティとの和解」を表している。汗をかく時間を4つに分け、休憩時間にはドアを開けることで、「人間の成長の4つの年代（幼年期、小児期、成人期、老年期）を表している¹⁶⁾。レナード・ペルティエは、自らのスウェットロッジでの体験を次のように表現している。「(スウェットの中で) 自分に起こった最も重要なこと、つまり最も深い精神的な洞察を祝うこと

14) Lenny Foster, “Spiritual Victory for Condemned Pima Prisoner” (29 April 1999), interview by Suky Hutton, <www.yvwiisdivnohii.net/News99/0499/990420victorysweat.htm>, (2021年10月15日閲覧)

15) Elizabeth Grobsmith, *Indians in Prison: Incarcerated Native Americans in Nebraska* (Lincoln, NB: University of Nebraska Press, 1994), p. 19.

16) Papequash の言葉。Waldram, *The Way of the Pipe*, p. 88, 90.

も、話すこともない。それは、あなたとワカンタンカ（創造主）の間のことである。あなたは自分自身の恐怖の最先端に立ち向かうことになるが、恐怖の中にも¹⁷⁾ **気づき**があり、それを通り抜けて別の領域に移行する」。

イルウィンによれば、刑務所でのパイプセレモニーやスウェットロッジの利用は、部族間の結束と精神的な自己確認を表現するものとして、汎ネイティブスピリチュアリティの新しい動きとなっている（Irwin, 2006, p. 53）。先住民の受刑者の多く（最大65%）は、刑務所で初めてスウェットロッジやパイプセレモニーを経験する。この導入は、先住民のアイデンティティをより強く感じ、多様な先住民のコミュニティから来た他の先住民の受刑者と協力するための文脈を提供する¹⁸⁾。受刑者や先住民のスピリチュアル・アドバイザーの話によると、パイプとスウェットは、バランスのとれた意味のある人生を送るため、他者への敬意と自分自身の実践における誠実さという価値観を確立することで、刑務所内外での生活を方向付けるために非常に重要なものとなっている。①禁酒、②暴力を振るわない、③女性を尊重する、④他人を受け入れる、⑤過去の行為を反省する、⑥パイプとスウェットを使って積極的に生活する、これらすべてが新しいムーブメントの教えの中心である¹⁹⁾。長老たちや先住民のスピリチュアル・アドバイザーは、部族間の良好な関係を促進し、パイプとスウェットを使った生命の物語を使って、協力的な人間関係を築くための精神的なエージェントとしてのパイプの力を示すために常に努力している。彼らは、受刑者の更生を支持しないコミュニティのメンバーから厳しい批判を受けることがあるが、刑務所内外でより大きな平和と調和を築くための手段として、部族間の結束とパイプの価値を強く訴え続けている²⁰⁾という。

エリザベス・グロブスミスによると、現在多くの刑務所で行われているパイ

17) Peltier, *Prison Writings*, pp. 184–186.

18) James B. Waldram, *The Way of the Pipe: Aboriginal Spirituality and Symbolic Healing in Canadian Prisons* (Ontario, Canada: Broadview Press, 1997), p. 136. Waldram によると、カナダのファーストピープルの受刑者の64%が、故郷のコミュニティにはスウェットが存在しないと答えた。

19) Waldram, *Ibid.*, pp. 130–131, 145; Leonard Peltier, *Prison Writings: My Life is My Sundance* (New York: St. Martin's Press, 1999), pp. 183–193.

20) Waldram, *Ibid.*, p. 110.

プセレモニーとスウェットロッジは、「部族の所属にばらつきがあるにもかかわらず、文化的、宗教的な表現の統一性を提供している」²¹⁾という。先住民の精神性の復活として、パイプセレモニーやスウェットロッジは、もはや特定の先住民の共同体やグループに縛られることのない、先住民の宗教的アイデンティティの肯定である。それは、ある刑務所のドラムグループが自らを「*Oyate Wanji* (一つの国)」と名づけたように、すべての部族、すべての国から「1つの国」を発見した囚人たちの、刑務所内の非ネイティブの権威と、真の個人的な経験との間の不安なギャップを解消するための、精神的な支柱となっている²²⁾。このような新しい動きは、多くの居留地で見られる特定の「伝統的な」土着宗教の複雑さを表しているにも関わらず、非常に多様性に富み、世界的に見ても珍しい。パイプセレモニーやスウェットロッジを刑務所で行うことは、長い間、非ネイティブの権威による抑圧と政治的操作を受けてきたことによる、虐待、欠乏、文化的喪失を癒すことを目的とした治療的な運動であり、グループの連帯と尊敬に満ちたコミュニティの関係を通じて、アイデンティティの回復と再統合を求める弔いの儀式である、とイルウィンは論じている (Irwin, 2006, pp. 53-54)。

パイプセレモニーやスウェットロッジは、受刑者を文化的・精神的なルーツに結びつけるもので、先住民が宗教的な慣習から離れてしまったことを癒すものである。先住民の宗教的権利を否定する現在進行中の植民地化のプロセスに抵抗することで、受刑者たちは宗教的な運動を形成してきた。それは、刑務所内の宗教的自由に関わる抑圧的傾向に逆らうだけでなく、より創造的に、インディアン居留地のコミュニティの中で顕在化し始めている広範な運動をもたらした。現在、多くの居留地で行われているプログラムでは、帰還した囚人や様々な精神的助言者が、アルコール依存症回復のためのレッド・ロード・アプローチと併せて「パイプの道」を続けている (Irwin, 2006, p. 54)。このように、非先住民の刑務所当局に抑圧され、疎外された先住民受刑者から始まった運動は、彼らの癒しと再統合の源としてだけでなく、多くの先住民コミュニティで

21) Grobsmith, *Indians in Prison*, p. 49; Waldram, *Ibid.*, p. 79.

22) Grobsmith, *Ibid.*, p. 93.

ますます存在感を増す運動として注目されている。

刑務所で行われるパイプセレモニーやスウェットロッジについて、一部のネイティブは「正当なものではない」と参加を拒否する者もいる。一部の囚人や、コミュニティの長老や教師から受け継いだ伝統を実践している大多数の人々は、この運動が先住民の精神的アイデンティティを真に定義するものとは考えない。しかし、居留地の治療・教育プログラムにおいて、「パイプの道」を利用した「ウェルネスと健康」のプログラムがますます普及している事実は、これらの運動が先住民の精神的アイデンティティを確認し、支援する手段であることを示唆している。このように、パイプセレモニーとスウェットロッジは、部族共同体を横断し、先住民の宗教的なアイデンティティの問題を解決するために積極的な手段を提供しており、癒しと再集中のためのパラダイムを示唆している²³⁾。このパラダイムの中でパイプとスウェットという古いセレモニーは、永続的な先住民の精神性の深い根源を肯定する運動に不可欠であり、新しい文脈で、先住民の宗教的権利の否定という疎外感を与える圧力に抵抗する。もちろん、この否定は本当は新しいものではなく、先住民の宗教や精神性の重要性を常に否定し、切り捨ててきた300年に及ぶ否定の遺産の結果である。しかし、刑務所内での「信教の自由の欠如」という弾圧の最新ヴァージョンは、先住民の囚人たちが、現代の部族間の宗教的アイデンティティを肯定するため、基本的なものとして再定義された伝統的な慣習を再構築することで、それらの権利を獲得することに驚くべき成功を取めている、とイルウィンは締めくくっている (Irwin, 2006, p. 56)。

まとめ

スウェットロッジは「浄化の儀礼」であるが、同時に「共感の儀礼」である。もしくは、「儀礼の共感的側面」が強調された儀礼である。それはコミュニティの集団的、社会的統合という意味も果たしているし、集団の力による個人の治癒の儀礼でもある。コミュニティがサポートするが、創造主や祖先た

23) Grobsmith, *Ibid.*, p. 88.

ち、東西南北のスピリットたち、祖父たる石や、祖母たる大地に祈り、自分の悔いをシェアして傾聴してもらい、コミュニティで支えてもらう。それは生きているものも、死んでいるものも、周囲の人々にも祖先たちや死者、精霊たちにもサポートしてもらおうという「浄化の儀礼」である。祈りは、懺悔し、誓う場にもなる。いわば、悩める参加者は、生きている世界にも、死者や目に見えないスピリットたちの世界にも、自己開示し、聞いてもらう。そこで参加者は、文字どおり、母の子宮で「裸にされる」。裸にされて、浄化され、生まれ変わる。日常的な浄化の儀式、スウェットロッジ。スウェットロッジの中で行われる、「動く祭壇」であるパイプのセレモニーとともに、参加者は祈る。それが日常の場であっても、刑務所の中であっても。

ギャレットが指摘したように、スウェットロッジは集団的な「治癒儀礼」であると同時に、カウンセリング的なグループセラピーである。そしてそれが一定の効果をあげている。一般人や治療を必要としているアルコール中毒患者やなんらかの依存症患者だけでなく、社会的な更生が必要な刑務所内のネイティブ、あるいは非ネイティブに至るまで、かなりの効果をあげている。刑務所内でのパイプセレモニーやスウェットロッジの実践は、宗教の自由を認めなかった刑務所内の非ネイティブの権威との戦いの中で、ここ数十年アメリカ先住民運動 (AIM) やラコタ族を中心とした精神的リーダーたちが勝ち取ってきたレッドパワームーブメントの功績であり、それがネイティブ/非ネイティブに関わらず、社会的、倫理的に人が更生する、あるいは魂、精神、肉体、人間世界を含めた環境の中で、人が健康的に生き直すきっかけを与えてくれる聖なる場所である。刑務所内ではもちろん、スウェットをリードする精神的なネイティブのリーダーたちがいるが、ネイティブアメリカンのスウェットロッジという日常的な治癒儀礼の中で、社会更生をしていく囚人たちの存在は、彼らを支える自助的なコミュニティ、人々のつながりと、それを見守る創造主、祖先、東西南北や大地のスピリットたちが背後にいたのである。スウェットロッジは、そのように伝統的なネイティブアメリカンの宗教的伝統の中で、よく考えられ、練られてきた、社会的装置（「浄化の儀礼」）ではないだろうか。そして、その中心は、サポートするコミュニティの共感力、傾聴力なのである。